



TITLE:

中世風流踊の名残

AUTHOR(S):

鶴岡, 學人

CITATION:

鶴岡, 學人. 中世風流踊の名残. 地球 1925, 4(2): 158-161

ISSUE DATE:

1925-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182980>

RIGHT:

談叢

中世風流踊の名殘

鶴岡學人

原人の社會には、宗教、戰鬪、狩獵、農業、等に關して部落の集會に際すると、やがて高潮した團體的情緒の表現として、一團の人々が踊り始める、たゞ恍惚として亂舞する、これに伴ふ樂器の類は笛や鼓の簡單なもので手振なども洗練されてゐないのは當然である。しかしかういふ原始的の亂舞から、後には莊嚴な旋律のある音樂に伴ふ宗教的な式樂が發生し、或は輕快な音樂と動作とを有する社交的な舞踊もしくは樂劇のやうな觀賞物が發達してきたのであるが、その發達の中途に於て民衆一般に流行したものが數百年の後に猶各地にのこつてゐて生きた風俗史の參考となる所が多い。和事始に

常陸國久慈郡金砂山に神祠あり其神甚だ靈あり、土人時を以てこれを祭る、七十二年に一度づゝ大祭あり、其日田樂あり種々の俗舞雜技をなす、これを名付けて田樂といふ、凡田樂は古昔大に行はるさいへ共近世其傳を失ふ故に餘國には有る所なし、たゞ常陸國にのみ民間に相傳へてこれあり

とあるが如き其一例であるが、こゝに記した田樂は朝野群集にのつてゐる、洛陽田樂記に堀河天皇永長元年（一〇九六）の夏京都に流行した田樂の類であつて同書には其の起る例を知らず、閭里より初めて公卿に及ぶ、高足一足、腰鼓、振鼓、銅鈸子、編木、ビンザカラ殖女養女の類、日夜、絶えまなく喧噪の甚しき能く人を驚かすとある、一城之人皆如狂焉と記した程で平安朝末期院政の時代には都鄙おしなべて大流行したものである、それを後世貝原好古が和事始をかいた當時常陸誌の記に従ひて常陸にのみ殘つたと記したのであるが、大正の今日にも猶、京都府北桑田郡には周山村矢代の日吉神社と大野村の大神神社との祭禮には笛と鼓で編木をもつて拜殿の上で踊る儀式がのこつてゐる、編木をもつて踊るこゝの田樂には歌がないが、この踏躍する踊の

外に、音頭取りが居つて歌謡につれて踊子が圓形に並んで手を振り袖を動かす所の振踊なるものがある、これも其起りは古く、田樂と相前後して我國の民間に起つたもので、室町時代にはこの踊のことを單に風流といつた、下學集に風流を譯して、風情の義なり、日本の俗、拍子物を呼んで風流といふとある、其歌の句が驚流の狂言若菜の中にでゝゐる。

木買はうく、小原木召され候へ、小原靜原芹生の里、鵜の清水に影は八瀬の里人、知られぬ梅の匂ふや、此藪里の春風に、松が咲き散る花までも雪は残りて春寒し、小原木召されよ、小原木召され候へ

といふ、これは小唄にしてあるが多分これは當時流行した風流の唱歌であらうといはれてゐるしかしてこの歌は餘程廣く天下に廣布したと見えて、土佐の山踊や若狹國內浦村大字山中に今もこのこつてゐる豊年踊には「小原木めされ候へ」といふかはりに「おはらぎよヨ、おはらぎよヨ」と一種の拍子調のものになつて残つてゐる、この踊に就いては同村の奥野喜一郎君が農閑を

さいて左の如く小生に通知して下さつた、

この踊は凡そ十年目位に豊年を選んで氏神祭禮の日に山王宮の神樂殿で行はれる、當日正午鳥居前に一同十歳前後の可愛い男の子が菅笠をいたゞいて出る、これが揃うと、女装した男の子二人が打出す太鼓の音につれて笠ボコ（風流傘のことなるべし）と稱するものを先頭に音頭取りの唄ひ出す『ねり』といふ歌で踊子衆が練り込む。この際新發意といふ役で烏帽子を冠り柵木の葉のついたまゝのものに種々の下げ物をしたのを肩にして踊の輪に加はるものがある、これが踊の指揮者で、踊が終る毎に肩にしてゐるものを動かしながら、

「サア／＼姫子達々々今度の踊は何々踊、この新發意が太鼓の頭でござるぞよ、すでん／＼と所望申さう」

といふと音頭がはじめられる、踊子は「ハアトトトトシツトコト、シツトコ、シツトコト」と囃して足ふみをして扇で手を叩きまゝす、しかし踊方は何分七八歳から十一歳までの子供ですから簡単なもので肩をもつて左の手を

太鼓に合して叩く位なことです。

このハアトトトトがまた面白い、近世文藝叢書の俚謠の中にある土佐の安藝郡の「山踊り」といふのに著しき類似を持つてゐる。

其文句の中に

おほらぎは／＼おほらぎかわいのう、くろき見さいな、チヨウリヨニハウリヨ云々とはやし

こゝ(去歲)の今宵はさゝされた、あつま今宵はかゝされた、さゝよりかゝがおいさしや

アリヤシタ、コリヤシタ、ヨイトコ、ヨイトコ、ヨイトコナ、シットロ、シットコト、ホニシヤソリヤコイ

と囃すのです。

このことに私が非常に興味を持つ所以は、私の故郷の北桑田郡で鶴ヶ岡村に三十年毎に大祭があつて、常陸の祭のやうに様々な舞踊を氏神に捧げるのですが、その各種の踊の一に振踊又は姫踊といふのがあつて、山中のご同様に練道行歌で社の拜殿にねりこんで赤い布を垂れた菅笠をきて女装した男の子が鼓手二人と新發意につれられて、同様の踊をするからなのです、しかもトウトウトウシットロトと新發意が掛聲

するのが誠に面白くそれがかやうに類似の例を二ヶ國に見出したので愉快に思うのである、鶴ヶ岡の方にも山中と同様に商踊や長者踊などの歌詞があるが、土地柄文句がちがひ山中の商踊りは地理學的に見ても餘程面白い、時候がこれらを談叢にかゝげて見る。

ね り (山中踊)

イヨ渡田の社を今朝こそ見たれ、泉水、椿、唐松、つゝじ、お庭の菊も今盛りヨ。今盛りヨ。今盛りヨ。

イヨ皆ひよ／＼の姫子でござる、打揃はずご免あれヨ、御免あれヨ

イヨこゝ開けさんせ開かずば戻る、いざこゝにござる姫子達ヨ、姫子達ヨ

イヨあゝの山見やれ、此の山見やれ、頂きつれておほらぎヨ、おほらぎヨ、ヨ

商 踊

皆一様にお重びやれ、皆一様にお重びやれ、若狭の濱より船に乗り、越前岬につかへたり、イヨ商踊りを一踊、越前岬も押し出して加賀の港へつかへたり、商踊を一踊り一踊り、加賀の湊を押し出して、じかんの市へさつかへたり、商踊りを一踊り一踊り、じかんの市も押し出して、夷が島へさつかへたり、商踊りを一踊り一踊り、夷が島では夷殿と商元では何

々と唐の衣や唐絲や、じんや、じやこや、たかの羽や、商
踊りを一踊り

よろづの商仕廻りていざ戻るよ我國へ、商踊は是迄揃ふ是迄
揃ふ

歌詞は古いやうにもあり、新しいやうにもあ
るがこの文句は大凡戦國前後のものであるらし
い、少くとも三味線渡來以前の歌曲をのこして
ゐることに疑がない。こゝにじかんの市とい
ふのが疑問である、若狹越前加賀と沿海航路を
歌つたのであるから、つぎは能登である小川敦
授はじかんの市は寺監の市といふことで總持寺
移轉の後に尙ほ門前町が残つた大寺院門前の市
場に出來て全盛となつた頃の歌ではあるまいか
と云はれる、後半の夷殿とか商ひとかいふ語も
何だか新しい、或はこの後半は徳川の初期に
出來た歌詞かもしれぬ、じんやじやこや應の
羽が商品で、唐糸とて絹糸を輸入した時代を思
ひ出さしめることだけは慥かである。山中踊の
文句で私の手許には猶多くの歌詞があり、安藝
の宮島や美濃のやはぎの長者を詠じてゐるのが

あるが尤も古いと思はれるのは左の文句です。

ヨ一オン鎌倉の御所のお庭にうはなり討があるものゝ、ヨ一
オンうはなりの今朝の出立にや、諸肌には金のつむぎ上には
涼しいかたびら下略

ウハナリウチ
後妻打といふことも平安末期以後の風俗で、こ

ゝに鎌倉を御所といふのがこの歌の古い年代を
語ると思はれる、これらの歌詞を鶴ヶ岡村の歌
詞に比較すると非常に面白いが、あまり長くな
るからこゝで切り上げる、讀者の中で類似の風
流踊を知つてゐる方から御報告を煩はしたい。

●ラトヴサア國との修交

本年七月四日伯林で我が本多公使と先方の委員との間に通
商條約が調印されたラトヴサア (Latvia) 國は新興國の一つで
バルチック海に沿ふ共和國である。舊ロシアの一地方で面積
六五、七九〇平方料、人口百七十二萬七千人ありてレット
ン族である。首都をリガミ呼ぶ。